

# 池田啓悟 『宮本百合子における女性労働と政治』

——一九三〇年代プロレタリア文学運動の一断面——

鳥木圭太

池田啓悟氏の初の単著となる『宮本百合子における女性労働と政治——一九三〇年代プロレタリア文学運動の一断面——』は、二〇一五年四月に風間書房より刊行された。

本書はこれまでの研究史において光のあてられることのない宮本（中條）百合子のプロレタリア文学運動期から戦後の小説作品をとりあげ、百合子が作品の中で描こうとしたテーマ——社会における女性労働およびそこで女性が直面する問題と彼女が所属したプロレタリア文学運動の政治的要請との相克を明らかにした意欲作である。

以下、二〇一六年三月一三日に開催された第二十二回占領開拓期文化研究会における著者を交えた合評会（質問者鳥木・萬田慶太）での討論を踏まえ、本書の内容を紹介する。

本書の構成（目次）は以下の通りである。

## 序章

第一章 与えられたプロレタリアート——中條百合子「ズラかった信吉」論——

第二章 〈接点〉の発見——中條百合子「舗道」論——

第三章 運動の中の抑圧——「愛情の問題」をめぐる林房雄と中條百合子——

第四章 「宮本百合子」の生成——中條／宮本百合子「小祝の一家」論——

第五章 統御とダイナミズム——

宮本百合子「雑踏」「海流」「道づれ」と社会主義リアリズム——

終章 〈空虚さ〉の行方——宮本百合子『二つの庭』論——

序章では、本書全体を俯瞰しつつ、百合子の「社会主義への目覚め」（二頁）というモチーフから論が説き起こされてい

\*

る。ここでは、「彼女にとってプロレタリア文学に取り組むと言うことは、自己の生きる道を切り開きたいという欲求と、プロレタリアートという他者の解放との接点を探る試み」（六頁）とあるように、すでに彼女がプロレタリア文学作家の道を歩む時点で、一つの葛藤を意識の内に抱え込んでいたことが明らかにされている。この葛藤は、「運動の方針への忠実さ」（同前）



と「社会の不当さへの闘い」（同前）という二つのテーマへとスライドしていったというのが、序章で示される大まかな見取り図である。本書はこの見取り図をもとに、第一章以下、「百合子作品が抱え込んだ矛盾がどのようなものである、それがどのような展開をたどった後の作品へとつながっていったかながっていったか

を明らかに」（六頁）にしていく。

第一章では百合子の初期のプロレタリア文学作品「ズラかった信吉」（『改造』一九三二年六月九月）を分析し、百合子としての社会主義とは何かを浮き彫りにしていく。百合子にとっての社会主義とは「新しい意識と制度とのつながりを実現する〈場〉」（二六頁）であると同時に「現状を相対化し批判するための〈場〉」（二七頁）としても機能している。こうした〈場〉としての社会主義は、彼女が自己実現を果たし、同一化を図っていくための規範として機能し、絶対的な「正しさ」として彼女を拘束していったという。この正しさは、むしろ現実における彼女の自己実現を阻む結果となっていたのではないか、という問いが本章の冒頭に設定されている。

また本章では、作品の執筆にあたり、百合子が依拠した規範が「一九三二年に於けるナツプの方針書」（『ナツプ』一九三二年四月）であることを指摘し、執筆の動機にソ連の社会制度や人々の社会意識の紹介という作家同盟の要請があったことを明らかにしている。そうした組織的要請をもとにながらも、百合子自身がソ連における女性の立場からその制度が抱え込んだ諸矛盾を感じし、それらを「新しい社会主義社会がどのように乗り越えていくか」（二五―六頁）をテーマに据えた作品である、というのが本章での分析である。しかし、同時にこの社会主義の「正しさ」が、こうしたソビエトにおける女性の抱えた問題を不可視化しているということも批判的に指摘されている。

第二章では、「女事務員」を主人公に据えた「舗道」(『婦人之友』一九三一年―四月)を通じ、大正期以降の都市消費社会の中で新たな階級として見出されてきたいわゆる新中間層の労働について、百合子がどのようなまなざしを注いだのかが明らかにされている。

本作で重要な役割を占める文化サークルは、百合子自身の組織体験をもとに描かれており、この文化サークルによって女事務員たちの間に刻み込まれた溝を埋め、「独自の利害を持つ集団とはみなされていなかったはずの「女たち」、作品ではそれをひとつの階級として立ち上げようとしている」(五七頁)と同時に、それが現実の作品の読者に対して働きかける役割を持つと分析している。

しかし、こうした「女たち」による共闘は描かれるものの、「男の社員」たちとの間にある分断は解決の糸口がみえない」(五七頁)とも述べられている。この「経済的地位」とはこととなる性にとづく階層化」(五八頁)の解決は、「方針の忠実な実践だけでもたらされることはないだろう」(五八頁)と結論づけられている。

第三章では一九二〇年代後半に本格的に日本に紹介されたコンタイズムをめぐる林房雄と百合子の応酬を軸に、作家同盟で提唱されたプロレタリア・リアリズムから唯物弁証法的創作方法、そしてそこで定式化された「題材の固定化」のテーゼと一連の蔵原理論の段階的發展とその内容を整理し、そこに

百合子が「愛情の問題」を通じて如何にコミットしていったかを分析している。

著者は社会主義における新たな人間関係や恋愛観を説く林房雄のコンタイズム論について、そこには一貫して男女間の身体的差異にもとづく非対称性、すなわち「生殖」の問題が欠落していること、「愛情の問題」にコミットした男性論者がみな一様に林房雄の論理構成をなぞっていることを指摘している。それはたとえば、「愛情の問題」をめぐる一連の作品で描かれた女性を抑圧する「変節者」が、運動全体のなかではごく一部の問題に過ぎず、それをもって運動全体を批判するにはあたらぬという論理である。すなわち、過ちを運動の本質に関わりのない「異物」として排除」(八四頁)するという論理である。蔵原惟人は「芸術的方法についての感想」(『ナツ』一九三一年九月・十月)の中で、問題を運動の構造的な問題から男女間の愛情問題へとスライドさせているが、これは彼の提唱するリアリズム論が、現実の問題を隠蔽していく過程でもあった。「愛情の問題」は、いわゆる「ハウスキーパー」を扱った作品群であり、百合子ですら運動の正当性を守るために、この「排除の理論」を行使することとなる。こうした「排除の理論」はリアリズムが運動に及ぼした現実的影響の一つであることを本章は明らかにしているのである。

第四章では百合子が「中條」から「宮本」に改姓する過程で、夫の宮本顕治からどのような抑圧を受けていたのかを、小説「小

祝の一家」(『文芸』一九三四年一月)の分析を通して明らかにしている。本作はプロレタリア詩人今野大力の家族をモデルにした小説であるが、初出で大量に散見された伏せ字部分が単行本では補われ、同時にそこには初出に見られた夫婦間に横たわる「ねじれ」(一一六頁)が解消されているという。このねじれが解消されていく過程が、百合子自身が顕治の不当な要求(宮本姓への改姓)に反発しながらも屈服し、その論理を受け入れていく過程と重ねて論じられる。

また、「祝の一家」で主人公乙女が夫の活動費を稼ぐために行う「女給」という労働は、当時から「それまでにない合理性や新鮮さをもった「新しい」存在」(二〇九頁)であると認識されていたが、それは同時に雇用主との正規の労働関係を結ぶことのない「感情労働」(一一一頁)であり、一般的な賃労働に対し劣位に置かれていたことを著者は指摘している。そして作品内においても乙女がそうしたヒエラルキーを内面化していくことで自らに対する夫の優位を担保していくという構図が描かれるという。この構図は百合子自身の女性の感情労働に対するきわめて限定的な「まなざし」(一一五頁)によって形成されており、宮本顕治との関係に序列を持ち込むという構図がそのままあてはめられていると著者は分析している。

第五章ではいわゆる「雑踏」系列の作品について、登場人物を自由に焦点化し、その内面を描きながら統御し、価値判断をおこなう「イデオロジカルな語り手」(二二九頁)の存在を指摘

している。この語り手の存在こそが社会主義リアリズム論争の中で焦点化されていった「何を・如何に」というテーゼに対し百合子がバルザック研究を通して導き出した答えであったという。すなわち、作中に描かれた対象に如何に関わるかという作者の主体性にこそ作者自身の「階級性」(二二八頁)が関わってくるのであり、そこにこそ百合子の問題意識が反映されていると分析している。

終章では「雑踏」系列と題材の点で多くの共有点を持つ「二つの庭」(『中央公論』一九四七年一、三一九頁)を扱い、主人公伸子と共同生活を営む吉見素子の表象に注目し、伸子が中産階級の歪みや抑圧(『空虚さ』)からの脱出を図るために社会主義に自己同一化を果たす過程で、素子のセクシュアリティを「不自然」(二六〇頁)なものとして否定してゆくと分析している。

しかし、素子の感情自体は作中においては「異物」(二六二頁)とされながらも、「排除」(八四頁)されることなくそこに描きとどめられている。こうした百合子作品における「異物」そのものを(宮本百合子というテクスト)を読み解く際の指標とすることを掲げて本書は結ばれている。

\*

本書は、個別の作品分析を通じてひとりの(プチブルジョア・インテリゲンチヤ)の女性がマルキシズム運動に参加し、その

理論や教義を内面化して「プロレタリア作家」になつ」（一頁）ていくという（転向の物語）を描き出している。それはすなわち（宮本百合子）という一つの作家イメージが同時代の言説空間の中で形成されていく過程を検証していくという作業でもあろう。著者いわく、それは作家イメージを形成していく「表現技法」の分析でもあり、戦後日本共産党を中心に形成されてきた（正典<sup>カノン</sup>）としての宮本百合子というイメージに対するカウンターイメージの創出でもあるという。

その際、彼女が内面化していくプロレタリア文学理論が、夫である宮本顕治や運動の理論的支柱であった蔵原惟人という具体的な男性主体による言説を通して提示されていくということに注目し値するであろう。つまり、本書で浮き彫りにされていく百合子の苦闘は、プロレタリア文学理論（≠男性性）との闘争（あるいは共犯）というフェミニズムの見取り図に収斂していくのだ。

しかし、にもかかわらず本書にはジェンダー・フェミニズム理論への言及や援用がほとんど見られない。合評会においても、その点について著者の意図や戦略を問う質問がなされた。著者はそれに対し、そもそも百合子自身はプロレタリア文学理論を男性性と認識していたのではなく、あくまで組織の規範としてその理論に従順であろうとしていたのであり、最初にそれをジェンダー・フェミニズムの立場から男性性として規定していくと、抑圧を構成するメカニズムの全体像を見失う恐れを指摘

している。

おそらくこの点が、本書が従来の百合子研究から決定的に分岐する点になるのではないだろうか。それは従来のジェンダー・フェミニズム理論にもとづく研究を否定するのではなく、（宮本百合子）というイメージ生成のメカニズムの別の側面を描き出すことで、従来の研究に接続され、あるいはこれを補完していくものであるということだ。

また、この問題については、討論の中で、百合子におけるインターセクショナルリティをどう考えるのかという指摘もなされた。階級や人種、民族、宗教や国籍などジェンダーの軸だけでは解決できない差別構造、あるいは女性性という括り方でははみ出してしまうようなセクシュアリティのあり方をどう考えるのか。こうした百合子を論じる際に必ずぶつかる問題である、階級とジェンダーの間に横たわる溝を埋めるものは何か。少なくとも百合子が依拠した当時のマルキシズムの中には、これらの問題の解決の糸口は見いだせない。

この点については本書がいわゆるアンペイドワーク（家事などの無償労働）に言及している点と関連があるように思われる。つまり、再生産領域における女性労働の問題が、百合子の中でどのように位置づけられるべきかという問題である。たとえば第四章において「小祝の一家」の中で女給という職業が労働とはみなされていなかったこと、あるいは終章において「二つの庭」の吉見素子の家事労働が伸子によって否定的に捉えられて

いることの分析を通し、従来の研究の枠組みではこうした問題が「セクシュアリティの充足」(二四五頁)に収斂していきがちであるのに対し、本書ではそこに百合子自身の「階級意識」という分析項を加えることで、セクシュアリティは問題の原因ではなく結果の一つであることを明らかにしている。百合子のテキストが描き出すものは、日常における違和感がマルキシズムの内包する問題そのものを撃つ可能性であり、本書における一連の分析はそこに迫る糸口を提示しているのである。

同時に討論では、こうしたイメージに収斂していく百合子の主体というものが、作家というレベルで捉えた時にはたしてどこまで実体性を持つのかという問題についても議論が交わされた。たとえば、宮本百合子が作家として生成すると述べた時に、宮本顕治の影響をどの程度具体的に作品から推し量れるのかという問題である。題材の採り方や運動方針として影響は受けていたとしても、それは本文に傍線を引いてここからここまでに影響が見られると指摘できるようなものではないであろう。また、百合子という作家イメージの生成について、本書では主として作者の側から検討されているが、そうしたイメージの生成にはテキストの受け手である読者もまた大きく寄与したであろう。今後こうした読者論的な視点からの研究の深化も期待されるところである。

さらに、討論では作者および語り手の位相と、その階層性をどのように処理するのかという点にも言及された。本書の特徴

として、テキストの語り手と作者が同列に論じられている点が挙げられる。しかし、社会主義リアリズムにおける作者とは異なる位相を持つ語り手の構築は、百合子だけでなく他の作家にも見られる特徴である。また、両者の位相の違いについて百合子本人がどこまで認識していたのかという問題も残る。本書では主として林房雄と百合子の論争に焦点が当てられているが、社会主義リアリズム論争全体の中で百合子の作品がどのように位置づけられるのかを問い直す必要があると思われる。著者本人も、通時的な縦軸のみでなく、文化や社会の状況という横軸の広がりの中で百合子作品を捉え直す意義について言及しており、今後の研究の進展が待たれるところである。

本書の末尾には百合子のテキストに刻まれた複数の「矛盾」(二六二頁)をどのように読み解くかという提言がなされている。それは中條／宮本百合子という主体にまつわるパーソナルな領域のみ還元できる問題ではなく、まさにいまここにあるアクチュアルな問題としてどう読み解くかが問われているのだ。本書は様々な点において百合子とは異なる時間・空間を生きる現代の読者へも切実な問いを投げかけているのである。